100　　**F**

◎ 指示があるまで開かないこと。

(平成18年2月19日　14時35分～17時05分)

注　意　事　項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 解答方法は次のとおりである。

(1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを(例1)では一つ、(例2)では二つ選び答案用紙に記入すること。

(例1) 101　県庁所在地はどれか。	(例2) 102　県庁所在地はどれか。2つ選べ。
a　栃木市	a　宇都宮市
b　川崎市	b　川崎市
c　神戸市	c　神戸市
d　倉敷市	d　倉敷市
e　別府市	e　別府市

(例1)の正解は「c」であるから答案用紙の

101 ⓐ ⓑ ⓒ ⓓ ⓔ のうち ⓒ をマークして

101 ⓐ ⓑ ● ⓓ ⓔ とすればよい。

(例2)の正解は「a」と「c」であるから答案用紙の

102 ⓐ ⓑ ⓒ ⓓ ⓔ のうち ⓐ と ⓒ をマークして

102 ● ⓑ ● ⓓ ⓔ とすればよい。

(2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。

良い解答の例…… ●（濃くマークすること。）

悪い解答の例…… ⊙ ⊖（解答したことにならない。）

(3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「※」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。

(4) ア.(例1)の質問には二つ以上解答した場合は誤りとする。

イ.(例2)の質問には一つ又は三つ以上解答した場合は誤りとする。

(5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1　28 歳の女性。妊娠 30 週から切迫早産で入院し安静臥床を続けていた。5 日前に妊娠 36 週で胎児に遷延一過性徐脈が出現し、緊急帝王切開術を受けた。早朝から左下肢に浮腫が出現し、痛みと灼熱感とを訴えている。悪露は正常、内診で子宮は超手拳大である。腹壁切開創に異常はない。

適切なのはどれか。

a　再開腹

b　強制歩行

c　利尿薬投与

d　抗凝固薬投与

e　子宮収縮促進薬投与

2　在胎 28 週の胎児。1 絨毛膜 2 羊膜性双胎と診断されている。妊娠初期には 2 児の大きさにほとんど差を認めなかったが、次第に差を認めるようになり、大きい方の児に羊水過多と胎児水腫とを認めるようになった。

異常があると考えられるのはどれか。

a　骨　髄

b　臍　帯

c　胎　盤

d　羊　膜

e　脱落膜

3　出生直後の新生児。体重 2,700 g。Apgar スコアは 1 分後 6 点。呼吸数 40/分。心拍数 132/分、整。全身にチアノーゼを認める。外表奇形を認めない。直ちに 100 % 酸素の投与を開始したが全身のチアノーゼは改善しない。胸部エックス線写真で肺野に異常を認めない。

次に行う検査はどれか。

a　血　糖

b　血清電解質

c　心電図

d　心エコー検査

e　頭部単純 CT

4　24 歳の女性。妊娠 40 週で 3,300 g の男児を経腟分娩した。子宮収縮は良好で、分娩 5 日後に退院した。退院数日後から気分が落ち込み、不眠、イライラ感が高まって、授乳をしないなど育児に対しても積極性がなくなってきた。1 週すると疲労感を訴え、思考力、集中力も減退し、動作も鈍くなり、家族が心配して近医を受診させ、スルピリドの投与を受けている。

産褥 1 か月目の健康診査時に認められる可能性が高いのはどれか。

a　後陣痛

b　赤色悪露

c　子宮留膿腫

d　子宮復古不全

e　乳汁分泌亢進

5　30歳の女性。昨年第一子出産後、赤ん坊に汚れが付いてはいけないと過剰に考えるようになった。外出から帰ってくるとすぐ衣類を着替え洗濯し、家の中の全てを毎朝消毒しないと気がすまないようになってきた。

最も考えられるのはどれか。

a　適応障害

b　強迫性障害

c　解離性障害

d　社会不安障害

e　身体醜形障害

6　9歳の男児。異常な行動のため来院した。1年3か月前に転校したときからまばたきを頻繁にするようになり、1年前からは、更に頭を振ったり、肩をゆすったりするようになった。10か月前から「あー」、「うー」などと意味のないことを言い、最近は授業中にも「くそ」、「ばか」、「死ね」などと独り言を言うようになった。

対応として適切なのはどれか。

a　転校を勧める。

b　言語療法を行う。

c　異常行動を自制させる。

d　ジアゼパムを投与する。

e　ハロペリドールを投与する。

7　生後1日の新生児。出生直後から右頸部に半球状の柔らかい膨隆を認める。呼吸障害は認めない。同部位の超音波検査では、多房性の嚢胞性病変を認める。局所の写真(別冊No. 1)を別に示す。

現時点での対応として適切なのはどれか。

a　経過観察

b　穿刺吸引

c　気管切開術

d　抗菌薬投与

e　腫瘤摘出術

別　冊
No. 1 写　真

8　11か月の乳児。生後2か月のとき上背部に紅色結節が生じ、次第に大きくなった。この腫瘤以外に皮膚病変はない。発達にも異常はない。背部腫瘤の写真(別冊No. 2)を別に示す。

異常がみられるのはどれか。

a　脳　波

b　眼　圧

c　呼吸数

d　血小板数

e　血清クレアチニン

別　冊
No. 2 写　真

9　50歳の女性。口腔内のびらんと体幹の水疱、びらんとを主訴に来院した。3か月前から口腔内に難治性のびらんが生じ、2か月前から体幹に水疱とびらんとを認めるようになった。入院後、副腎皮質ステロイド薬(1 mg/kg/日)を2か月間投与したが効果がなかった。2週前から収縮期血圧230 mmHg、空腹時血糖350 mg/dlで、尿糖が強陽性となった。入院時の胸腹部の写真(別冊No. 3A)と皮膚生検H-E染色標本(別冊No. 3B)とを別に示す。

現時点での対応として適切なのはどれか。

a　血漿交換

b　PUVA療法

c　抗菌薬静注

d　レチノイド内服

e　副腎皮質ステロイド薬の即時投与中止

別　冊
No.　3　写真A、B

10　12歳の男児。遷延する発熱を主訴に来院した。1歳時に心室中隔欠損症の根治術を受けたが残存短絡がある。2週前に扁桃摘出術を受けた。5日前から夕方になると39℃以上の発熱を認める。食思不振と嘔気とがある。体温38.2℃。呼吸数30/分。脈拍100/分、整。四肢に点状出血を認める。胸骨第3肋間左縁に2/6度の全収縮期雑音を聴取する。腹部は平坦、軟。肝を右肋骨弓下に3 cm、脾を左肋骨弓下に3 cm触れる。血液所見：赤沈68 mm/1時間、赤血球352万、Hb 11.0 g/dl、白血球22,000(桿状核好中球12 %、分葉核好中球64 %、好酸球3 %、単球5 %、リンパ球16 %)、血小板12万。CRP 12.0 mg/dl。

診断に必要な検査はどれか。2つ選べ。

a　血液培養

b　大動脈造影

c　冠動脈造影

d　頭部単純CT

e　心エコー検査

11　62歳の男性。2週前から左眼の像のゆがみを自覚し、5日前から視力が低下したため来院した。視力は右1.2(矯正不能)、左0.04(矯正不能)である。このときの左眼の眼底写真(別冊No. 4)を別に示す。

出血の原因はどれか。

a　毛様体新生血管

b　網膜毛細血管瘤

c　網膜細動脈瘤

d　網膜新生血管

e　脈絡膜新生血管

別　冊
No.　4　写　　真

12　2歳の女児。1歳5か月ころから眼が内側に寄るのに家族が気付いて来院した。左眼の内斜視を認め、交代視は可能である。中間透光体と眼底とに異常はない。調節麻痺薬点眼下で屈折は両眼ともに＋5.0ジオプトリーである。

最初に行う治療はどれか。

a　近方注視訓練

b　右眼の遮閉治療

c　完全矯正の眼鏡装用

d　副交感神経遮断薬点眼

e　両眼の内直筋後転術

13　32歳の男性。発熱と嚥下困難とを主訴に来院した。4日前から発熱と咽頭痛とがあったが放置していた。昨日から高熱と開口障害とが出現している。血液所見：赤血球480万、Hb 13.0 g/dl、白血球13,600。血清生化学所見：AST 30単位、ALT 28単位。CRP 13.6 mg/dl。咽頭部の写真(別冊No. 5A)と咽頭部造影CT(別冊No. 5B)とを別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　急性咽頭炎

b　扁桃周囲膿瘍

c　腺窩性扁桃炎

d　伝染性単核症

e　アフタ性口内炎

別　冊
No.　5　写真A、B

14　45歳の男性。嗄声を主訴に来院した。2年前から誘因なく嗄声が出現し、咽喉異物感と慢性的な咳とが続いている。喫煙歴と飲酒歴とはない。喉頭内視鏡写真(別冊No. 6)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　喉頭癌

b　声帯結節

c　喉頭乳頭腫

d　慢性喉頭炎

e　ポリープ様声帯

別　冊
No.　6　写　真

15　29歳の女性。会社の健康診断の胸部エックス線写真で異常を指摘され、精査のため来院した。10年前からしばしば鼻出血を認めているが、放置している。身長149 cm、体重45 kg。体温36.4℃。呼吸数20/分。脈拍84/分、整。血圧120/80 mmHg。口腔内に血管拡張を認める。心音と呼吸音とに異常を認めない。胸部単純CT(別冊No. 7)を別に示す。

診断確定に必要なのはどれか。

a　肺血管造影

b　呼吸機能検査

c　CTガイド下肺生検

d　気管支肺胞洗浄

e　肺血流シンチグラフィ

別　冊
No.　7　写　真

16　45歳の女性。発熱、咳および呼吸困難を主訴に来院した。子供の夏休みに合わせて、築30年の木造家屋から引越するため、押入れの整理を行ったところ、夕方から、発熱、咳および呼吸困難が出現した。意識は清明。体温38.2℃。呼吸数20/分。脈拍92/分、整。血圧110/68 mmHg。両肺野にfine crackles を聴取する。血液所見：赤沈40 mm/1時間、赤血球410万、Hb 14.1 g/dl、Ht 42 %、白血球14,200(桿状核好中球16 %、分葉核好中球65 %、好酸球2 %、単球3 %、リンパ球14 %)。胸部エックス線写真で両側性にびまん性散布性粒状影を認める。抗菌薬の投与を受けたが、症状の改善はない。

この疾患で誤っているのはどれか。

a　拘束性換気障害を認める。

b　発症にはIgE抗体が関与する。

c　カビの反復吸入が原因である。

d　副腎皮質ステロイド薬を投与する。

e　気管支肺胞洗浄液中のリンパ球が増加する。

17　77歳の男性。胸部エックス線撮影で異常を指摘されて来院した。意識は清明。身長168 cm、体重67 kg。心雑音はなく、呼吸音に異常はない。血液所見：赤血球391万、Hb 12.1 g/dl、Ht 36 %、白血球7,000。血清生化学所見：総蛋白6.5 g/dl、アルブミン3.6 g/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、AST 18単位、ALT 13単位、LDH 350単位(基準176 ～ 353)、CK 32単位(基準10 ～ 40)。胸部造影CT(別冊No. 8A)と再構成三次元画像(別冊No. 8B)とを別に示す。

この患者に起こりうるのはどれか。2つ選べ。

a　嗄　声

b　咽頭痛

c　嚥下痛

d　左上肢麻痺

e　出血性ショック

別　冊
No.　8　写真A、B

18　73歳の男性。1か月前からの咳嗽と粘液性痰とを主訴に来院した。30年間、鉱山で働いていた。呼吸困難はHugh-Jones分類のⅢ度である。胸部エックス線写真(別冊No. 9)を別に示す。

この疾患で頻度の高い合併症はどれか。

a　肺結核

b　リポイド肺炎

c　好酸球性肺炎

d　びまん性汎細気管支炎

e　ニューモシスチス肺炎

別　冊
No.　9　写　　真

19　33歳の男性。左胸痛と呼吸困難とを主訴に救急車で搬入された。昨夜出現した胸痛は明け方から増強し、呼吸困難も自覚するようになった。3年前にも胸痛があったが自然軽快した。意識は清明。身長167 cm、体重53 kg。体温36.9 ℃。呼吸数24/分。脈拍96/分、整。血圧116/78 mmHg。左下肺野で呼吸音は消失している。血液所見：赤血球380万、Hb 11.2 g/dl、Ht 38 %、白血球13,300。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.40、PaO_2 70 Torr、$PaCO_2$ 31 Torr。胸部エックス線写真(別冊No. 10A)と胸部単純CT(別冊No. 10B)とを別に示す。

診断はどれか。

a　肺　炎

b　胸膜炎

c　血気胸

d　肺塞栓症

e　急性縦隔炎

別　冊
No. 10　写真A、B

20　72歳の女性。動悸を主訴に来院した。数年前から労作時の動悸を自覚していた。脳梗塞の既往がある。脈拍104/分、不整。血圧130/74 mmHg。心尖部を最強点とする2/6度の全収縮期雑音を聴取する。心電図(別冊No. 11)を別に示す。

治療薬として適切なのはどれか。2つ選べ。

a　ワーファリン

b　ジギタリス

c　アトロピン

d　リドカイン

e　ドパミン

別　冊
No. 11　　図

21　1歳11か月の男児。手術のため入院した。出生直後からチアノーゼと心雑音とを指摘され、生後1か月目に右側のBlalock-Taussig短絡術を受けた。意識は清明。身長85 cm、体重12 kg。口唇に中等度のチアノーゼを認める。胸骨左縁第4肋間に2/6度の収縮期雑音を聴取する。血液所見：赤血球632万、Hb 18.8 g/dl、Ht 54 %、白血球9,400。心臓カテーテル検査所見：肺動脈圧12 mmHg、右室圧74 mmHg、左室圧74 mmHg、Qp/Qs 0.6。心電図(別冊No. 12A)と心エコー図(別冊No. 12B)とを別に示す。

診断はどれか。

a　肺動脈閉鎖症

b　Fallot四徴症

c　三尖弁閉鎖症

d　修正大血管転位症

e　総動脈幹症

別　冊
No. 12　図A、写真B

22　65歳の男性。体動時の息切れを主訴に来院した。身長160 cm、体重55 kg。呼吸数14/分。脈拍76/分、整。血圧138/82 mmHg。心音に異常を認めない。左下肺野で呼吸音の減弱を認める。胸部エックス線写真(別冊No. 13A)と胸部単純CT(別冊No. 13B)とを別に示す。

この患者に認めるのはどれか。

a　左上肢痛

b　チアノーゼ

c　Horner症候群

d　横隔神経麻痺

e　上大静脈症候群

別　冊
No. 13　写真A、B

23　32歳の女性。2週以上続く37 ℃台の発熱を主訴に来院した。3週前に抜歯を行った。体温37.8 ℃。脈拍84/分、整。Ⅲ音と心尖部を最強点とする3/6度の全収縮期雑音とを聴取する。血液所見：赤血球320万、Hb 9.8 g/dl、Ht 32 %、白血球9,800、血小板20万。血清生化学所見：AST 18単位、ALT 16単位、LDH 260単位(基準176 ～ 353)、CK 35単位(基準10 ～ 40)。CRP 7.6 mg/dl。心エコー検査で僧帽弁に疣贅を認める。

この疾患に特徴的でないのはどれか。

a　黄色腫

b　爪下線状出血斑

c　Osler結節

d　Roth斑

e　脾　腫

24　7歳の男児。突然の咳と呼吸困難とを主訴に来院した。今朝から突然に咳が出始め、呼吸困難が次第に増強した。体温 37.3 ℃。呼吸数 40/分。呼気性喘鳴と胸骨上部の陥凹とを認める。血液所見：赤血球 425 万、Hb 13.1 g/dl、白血球 15,400（桿状核好中球 5 %、分葉核好中球 57 %、好酸球 12 %、単球 8 %、リンパ球 18 %）、血小板 23 万。CRP 0.9 mg/dl。胸部エックス線写真（別冊No. 14）を別に示す。

治療として適切なのはどれか。2 つ選べ。

a　β_2 受容体刺激薬の吸入

b　抗ヒスタミン薬の内服

c　リン酸コデインの内服

d　利尿薬の静脈内投与

e　アミノフィリンの静脈内投与

別　冊
No. 14　写　　真

25　42 歳の男性。就寝中に出現する前胸部痛を主訴に来院した。日中には自覚症状はない。安静時心電図に異常を認めないが、ホルター心電図では、症状出現時に一致して ST 上昇を認めた。

発作を誘発するのはどれか。2 つ選べ。

a　酸　素

b　過　食

c　過換気

d　α 受容体遮断薬

e　アセチルコリン

26　74 歳の女性。前胸部痛で緊急入院した。前胸部痛は 4 日前に起こり、徐々に改善したが、悪心を伴う胸部圧迫感が持続している。20 年来高血圧の治療を受けている。入院翌日、突然胸部苦悶感が出現し、血圧 72/40 mmHg まで低下した。前胸部に全収縮期雑音を新たに聴取する。心電図（別冊No. 15A）と心エコー図（別冊No. 15B、C）とを別に示す。

診断はどれか。

a　梗塞後狭心症

b　乳頭筋断裂

c　心タンポナーデ

d　心室中隔穿孔

e　右室梗塞

別　冊
No. 15　図A、写真B、C

27　81歳の女性。胸やけを主訴に来院した。3年前から胸やけと前胸部痛とを自覚することがあった。症状が次第に増悪し、最近2か月で5kgの体重減少がみられる。体温36.1℃。脈拍72/分、整。心雑音はなく、呼吸音に異常を認めない。血液所見：赤血球325万、Hb 9.9 g/dl、Ht 30％、血小板29万。血清生化学所見：総蛋白6.7 g/dl、アルブミン3.6 g/dl、尿素窒素18 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、総ビリルビン0.6 mg/dl、AST 18単位、ALT 10単位。上部消化管造影写真(別冊No. 16)を別に示す。

診断はどれか。

a　食道憩室

b　食道裂孔ヘルニア

c　横隔膜麻痺

d　胃軸捻転

e　胃　癌

別　冊
No. 16　写　　真

28　21歳の男性。下痢と血便とを主訴に来院した。2か月前から微熱、軟便および倦怠感があったが、勉強が忙しかったので放置していた。2日前から37℃台の発熱があり、1日3、4行の血液を混じた軟便がある。血液所見：赤沈10 mm/1時間、赤血球480万、Hb 14.2 g/dl、白血球7,900。大腸内視鏡写真(別冊No. 17)を別に示す。

まず行う治療として適切なのはどれか。

a　酸分泌抑制薬投与

b　抗菌薬投与

c　サラゾスルファピリジン投与

d　副腎皮質ステロイド薬投与

e　中心静脈栄養

別　冊
No. 17　写　　真

29　45歳の女性。会社の健康診断で2年連続して肝障害を指摘され来院した。飲酒はしない。身長158 cm、体重46 kg。腹部所見に異常はなく、肝も触知しない。血清生化学所見：空腹時血糖86 mg/dl、総蛋白7.6 g/dl、ZTT 19.2単位(基準4.0～14.5)、AST 62単位、ALT 106単位、ALP 200単位(基準260以下)、γ-GTP 35単位(基準8～50)。

診断に有用な自己抗体はどれか。2つ選べ。

a　抗核抗体

b　抗ENA抗体

c　抗Jo-1抗体

d　抗平滑筋抗体

e　抗ミトコンドリア抗体

30　69歳の男性。2か月前から持続する背部の鈍痛を主訴に来院した。腹部と背部とに異常を認めない。腹部造影CT(別冊No. 18)を別に示す。

診断に有用な腫瘍マーカーはどれか。

a　AFP

b　CA19-9

c　SCC

d　NSE

e　PSA

別　冊
No. 18　写　　真

31　67歳の男性。持続性の強い腹痛を主訴に来院した。3年前から虚血性心疾患と心房細動とで通院中である。10時間前に腹痛が突然出現し、徐々に増強した。腹部は全体に膨隆し、腸雑音を聴取しない。打診で鼓音を呈し、腹部全体に圧痛とBlumberg徴候とを認める。血液所見：赤血球512万、Hb 16.2 g/dl、白血球12,800、血小板18万。血清生化学所見：総蛋白7.6 g/dl、アルブミン5.1 g/dl、総ビリルビン0.6 mg/dl、AST 112単位、ALT 35単位、LDH 482単位(基準176～353)、アミラーゼ124単位(基準37～160)、CK 186単位(基準10～40)。腹部造影CT(別冊No. 19、頭側から順にA、B、C)を別に示す。

診断はどれか。

a　腸重積症

b　腸管軸捻転症

c　消化管穿孔

d　上腸間膜動脈血栓症

e　絞扼性イレウス

別　冊
No. 19　写真A、B、C

32　65歳の男性。1週前からの間欠的腹痛と便秘とを主訴に来院した。下腹部に手術瘢痕と同部の膨隆とを認める。腹部造影CT(別冊No. 20)を別に示す。

治療として最も適切なのはどれか。

a　高圧浣腸

b　穿刺吸引

c　開腹ドレナージ

d　腹壁修復

e　腫瘍切除

別　冊
No. 20　写　　真

33　62歳の男性。腹部不快感を主訴に来院した。1年前に大腸癌の手術を受けた。腹部造影CT(別冊No. 21)を別に示す。

治療として適切なのはどれか。

a　肝動脈塞栓術

b　抗癌化学療法

c　放射線治療

d　ラジオ波焼灼

e　肝切除

別　冊
No. 21　写　　真

34　75歳の男性。腹部膨満と嘔吐とを主訴に来院した。65歳から高血圧症で降圧薬を服用中である。腹部手術の既往はない。半年前から排便困難と便柱狭小とがあり、時々血便も認めていた。1週前から便秘が続き、昨日から排ガスが消失した。腹部は全体に膨隆しているが、圧痛や筋性防御は認めない。直腸診で全周性の腫瘤を触知する。血液所見：赤血球380万、Hb 10.2 g/dl、Ht 33 %、白血球8,600、血小板38万。血清生化学所見：総蛋白6.2 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、尿素窒素20 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl。免疫学所見：CRP 0.5 mg/dl、CEA 15 ng/ml(基準5以下)。

治療として最も適切なのはどれか。

a　胃管挿入

b　高圧浣腸

c　緩下薬投与

d　抗癌化学療法

e　人工肛門造設

35　52歳の女性。人間ドックで胃の病変を指摘され来院した。身体診察で腹部に異常を認めない。上部消化管造影写真(別冊No. 22A)と内視鏡写真(別冊No. 22B)とを別に示す。

治療として最も適切なのはどれか。

a　胃粘膜保護薬の投与

b　酸分泌抑制薬の投与

c　内視鏡的粘膜切除

d　迷走神経切離

e　胃切除

別　冊
No. 22　写真A、B

36　49歳の女性。貧血を指摘され来院した。若いころから立ちくらみとめまいとを感じている。6人の同胞のうち姉と弟とが以前から貧血を指摘されている。脾を左肋骨弓下に3 cm触知する。血液所見：赤血球443万、Hb 8.7 g/dl、Ht 27 %、網赤血球19 ‰、ヘモグロビンF 6.6 %(基準2以下)、ヘモグロビンA_2 8.9 %(基準1.2〜3.5)、白血球4,600(桿状核好中球4 %、分葉核好中球53 %、単球1 %、リンパ球42 %)、血小板29万、総鉄結合能〈TIBC〉290 μg/dl(基準290〜390)。血清生化学所見：フェリチン95 ng/ml(基準20〜120)、Fe 100 μg/dl。末梢血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 23)を別に示す。

考えられる疾患はどれか。

a　鉄欠乏性貧血

b　鉄芽球性貧血

c　巨赤芽球性貧血

d　サラセミア

e　赤血球酵素異常症

別　冊
No. 23　写　　真

37　56歳の男性。全身の痒みを主訴に来院した。家族歴と既往歴とに特記すべきことはない。5年前から禁煙している。1年前から赤ら顔で、定期健康診断の血液検査で異常を指摘されたが放置していた。最近、頭重と耳鳴りとを自覚するようになった。呼吸数20/分。脈拍84/分、整。血圧146/94 mmHg。顔色は暗赤紫色調で口唇にチアノーゼを認める。皮膚には掻爬痕があり、四肢静脈は怒張している。頸部リンパ節腫大はない。胸部には異常なく、腹部で左肋骨弓下に脾を触知する。血液所見：赤血球720万、Hb 20.2 g/dl、Ht 56 %、白血球11,200(好中球75 %、好酸球3 %、好塩基球5 %、単球3 %、リンパ球14 %)、血小板54万、総鉄結合能〈TIBC〉376 μg/dl(基準290〜390)。血清生化学所見：総蛋白7.1 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、フェリチン18 ng/ml(基準20〜120)、尿素窒素19 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、尿酸7.8 mg/dl、AST 37単位、ALT 32単位、LDH 430単位(基準176〜353)、Fe 25 μg/dl。CRP 0.2 mg/dl。

低下しているのはどれか。2つ選べ。

a　循環赤血球量

b　平均赤血球容積(MCV)

c　動脈血酸素飽和度

d　血中エリスロポエチン濃度

e　好中球アルカリホスファターゼ指数

38　5歳の男児。半年前から鼻出血を繰り返すため来院した。他部位に出血傾向は認めない。体温36.6℃。脈拍88/分、整。眼瞼結膜と眼球結膜とに異常はない。心雑音はなく、呼吸音に異常を認めない。腹部は平坦で、肝・脾を触れない。血液所見：赤血球380万、Hb 10.4 g/dl、白血球8,000、血小板15万、出血時間10分(基準7分以下)、プロトロンビン時間12秒(基準10～14)、APTT 56.4秒(基準対照32.2)、血小板粘着能に軽度の低下がみられる。

止血療法に最も適しているのはどれか。

a　第Ⅸ因子

b　第Ⅷ因子

c　ビタミンK

d　フィブリノゲン

e　デスモプレシン(DDAVP)

39　46歳の男性。1週前から続く下肢の脱力感と全身倦怠感とを主訴に来院した。生来健康で、一人暮らしをしている。最近は飲酒量が増加し、日本酒を毎日5合飲んでいる。身長170 cm、体重63 kg。脈拍72/分、整。血圧138/84 mmHg。胸部と腹部とに異常はない。下腿に浮腫を認めない。尿所見：蛋白(－)、糖(－)、潜血(－)、沈渣に異常はない。尿中Na排泄量150 mEq/日、K排泄量52 mEq/日(基準25～60)。血清生化学所見：総蛋白6.0 g/dl、アルブミン3.5 g/dl、尿素窒素13 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、CK 180単位(基準10～40)、Na 135 mEq/l、K 2.8 mEq/l、Cl 90 mEq/l、Ca 7.0 mg/dl、Mg 1.5 mg/dl(基準1.8～2.5)、アルドステロン8 ng/dl(基準5～10)、血漿レニン活性1.5 ng/ml/時間(基準1.2～2.5)。

補充療法として最も適切なのはどれか。

a　ナトリウム

b　カリウム

c　カルシウム

d　マグネシウム

e　重炭酸イオン

40　13歳の男子。学校検尿で異常を指摘され来院した。自覚症状はない。脈拍72/分、整。血圧134/78 mmHg。心雑音はない。腹部は平坦で、肝・脾を触れない。眼瞼と下腿とに浮腫を認めない。尿所見：蛋白3＋、沈渣に赤血球10～15/1視野、白血球2～3/1視野を認める。血液所見：赤血球420万、白血球7,800。血清生化学所見：総蛋白6.8 g/dl、アルブミン3.6 g/dl、尿素窒素17 mg/dl、クレアチニン0.7 mg/dl、総コレステロール190 mg/dl。腎生検の光顕PAS染色標本(別冊No. 24A)と蛍光IgM免疫組織染色標本(別冊No. 24B)とを別に示す。腎生検で採取された糸球体のいくつかに同様の所見を認める。

この疾患について正しいのはどれか。

a　小児の慢性糸球体腎炎で最も多い。

b　血清C3が低下する。

c　IgGクリアランスが増加する。

d　副腎皮質ステロイド薬が著効する。

e　予後は良好である。

別　冊
No. 24　写真A、B

41　48歳の女性。2か月前から両手のしびれが持続するため来院した。尿所見：pH 7.6。血清生化学所見：Na 145 mEq/l、K 2.7 mEq/l、Cl 115 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.35、PaO_2 98 Torr、$PaCO_2$ 33 Torr、HCO_3^- 18 mEq/l。

基礎にある酸塩基平衡障害はどれか。

a　呼吸性アルカローシス

b　呼吸性アシドーシス

c　代謝性アルカローシス

d　アニオンギャップ正常の代謝性アシドーシス

e　アニオンギャップ増加の代謝性アシドーシス

42　32歳の女性。未経妊。月経痛と3年間の不妊とを主訴に来院した。基礎体温は2相性で、卵管の通過性と性交後試験とに異常を認めない。夫の精液所見は正常。内診で右卵巣が鶏卵大に腫大し、可動性不良である。直腸診でDouglas窩に硬結と圧痛とを認める。超音波検査で右付属器部に径8 cm、内容が高輝度の嚢胞を認める。血中プロラクチン12 ng/ml(基準30以下)。血清CA125 128 U/ml(基準35以下)。骨盤部単純MRIのT_1強調像(別冊No. 25A)と脂肪抑制T_1強調像(別冊No. 25B)とを別に示す。

治療として最も適切なのはどれか。

a　クロミフェン療法

b　ゴナドトロピン療法

c　ブロモクリプチン療法

d　体外受精・胚移植

e　腹腔鏡下卵巣嚢胞摘出術

別　冊
No. 25　写真A、B

43　28歳の女性。帯下の増加を主訴に来院した。内診と細胞診とを行った後、コルポスコピィを施行した。酢酸加工後のコルポスコピィ写真(別冊No. 26)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

a　トリコモナス腟炎

b　クラミジア頸管炎

c　上皮内癌

d　浸潤扁平上皮癌

e　浸潤腺癌

別　冊
No. 26　写　　真

44　46 歳の男性。手足のしびれと脱力とを主訴に来院した。32 歳ころから両足趾にピリピリ感があり、便秘と下痢とを繰り返すようになった。39 歳の時に湯たんぽで両足に熱傷を負ったが、熱さや痛みをほとんど感じず、このころから勃起障害を認めている。40 歳ころから徐々に両下肢に力が入りにくく歩行が困難となり、手指の筋萎縮と感覚障害も進行している。最近は立つと失神することが多くなり、手足には暑い日でも汗をかかない。母親と兄とに同様の症状を認める。

正しいのはどれか。 2 つ選べ。

a　伴性劣性遺伝する。

b　進行すると痴呆を呈する。

c　血清中に異常蛋白を認める。

d　血漿交換が有効である。

e　肝移植が有効である。

45　30 歳の男性。記憶の欠損を心配した妻に付き添われ来院した。数年前から数秒間口をもぐもぐさせることがあり、本人は全く気付いていないが、妻は気になっていた。昨日妻を助手席に乗せて運転中、急に表情が変わり、車が壁に衝突した。意識は清明。身長 175 cm、体重 69 kg。血圧 130/76 mmHg。本人は顔面に昨日の事故で負った傷を示しながら、「全く記憶にないのです。怖くてもう車の運転ができません」と神妙に答えるのみである。

最も考えられるのはどれか。

a　不随意運動

b　逆向性健忘

c　解離性障害

d　側頭葉てんかん

e　睡眠時無呼吸症候群

46　43 歳の男性。右下肢の脱力感を主訴に来院した。 2 週前、重量物を挙上した際に腰部に激痛を認めた。右下腿外側から足背への感覚障害を認める。

この患者にみられる所見はどれか。 2 つ選べ。

a　排尿困難

b　膝蓋腱反射消失

c　膝伸展筋力低下

d　母趾伸展筋力低下

e　Lasègue テスト陽性

47　56 歳の女性。皮疹と筋力低下とを主訴に来院した。半年前から階段の昇降がつらくなり、しゃがみ立ちが困難になった。最近、上眼瞼に紫紅色の浮腫が、肘と膝関節との伸側に紅斑が出現した。半年間で 5 kg 体重が減少した。身長 161 cm、体重 37 kg。体温 37.6 ℃。脈拍 80/分、整。血圧 104/62 mmHg。前額部、鼻唇溝、後頭部および後頸部に紅斑を認める。右頸部と両腋窩とに大豆大のリンパ節を触知する。心雑音はない。両側下肺野に fine crackles を聴取する。腹部は平坦で、肝・脾を触知しない。徒手筋力テストで、頸筋 3 、両側の上下肢筋 4 。神経学的に異常所見はない。尿所見：蛋白(−)、糖(−)。便潜血 1 +。血液所見：赤沈 25 mm/ 1 時間、赤血球 366 万、Hb 10.9 g/dl、白血球 6,200、血小板 20 万。血清生化学所見：空腹時血糖 100 mg/dl、尿素窒素 10 mg/dl、クレアチニン 0.3 mg/dl、AST 50 単位、ALT 32 単位、CK 148 単位(基準 10〜40)。免疫学所見：CRP 0.1 mg/dl、抗核抗体 80 倍(基準 20 以下)。

この患者で予想される合併症はどれか。 2 つ選べ。

a　感染症

b　腎障害

c　悪性腫瘍

d　間質性肺炎

e　中枢神経障害

48　24歳の女性。発熱、頭痛および嘔吐を主訴に救急車で搬入された。一昨日の夜から高熱、強い頭痛および嘔吐が出現し、背部痛を伴っている。身長156 cm、体重51 kg。体温38.6 ℃。呼吸数22/分。脈拍112/分、整。血圧80/56 mmHg。胸部に異常を認めない。項部硬直とKernig徴候とを認める。尿所見：蛋白1.＋、糖(－)。脳脊髄液所見：外観混濁、圧240 mmH_2O(基準70～170)、細胞数2,560/μl(基準0～2)(多核球95 %)、蛋白500 mg/dl(基準15～45)、糖15 mg/dl(基準50～75)。血液所見：赤血球420万、Hb 13.2 g/dl、Ht 42 %、白血球23,000。

推定される病原体はどれか。

a　結核菌

b　髄膜炎菌

c　クリプトコッカス

d　サイトメガロウイルス

e　エコー(ECHO)ウイルス

49　66歳の男性。起床後、洗顔中に突然右半身の脱力をきたし、転倒したため救急車で搬入された。65歳の定年まで元気に仕事をしていた。意識はJCS I-1。脈拍84/分、整。血圧154/90 mmHg。頸部血管雑音はなく、胸腹部に異常を認めない。神経学的所見では左への共同偏視、右片麻痺および失語を認める。発症1.5時間後に撮影した頭部単純CT(別冊No. 27A、B)を別に示す。

診断はどれか。

a　脳塞栓症

b　ラクナ梗塞

c　硬膜下血腫

d　くも膜下出血

e　静脈洞血栓症

別　冊
No. 27　写真A、B

50　65歳の男性。筋力低下を主訴に来院した。1年前から上肢の筋がやせて筋力が低下してきた。5か月前から歩行に際して疲労が目立つようになり、階段を昇るのが困難となった。2か月前から言語が不明瞭になった。意識は清明。身長170 cm、体重53 kg。呼吸数26/分、整。舌の萎縮を認める。四肢に筋萎縮と中等度の筋力低下とを認める。上下肢ともに深部腱反射は亢進し、Babinski徴候は両側で陽性である。感覚は正常である。排尿障害はない。

病変部位として考えられるのはどれか。2つ選べ。

a　黒　質

b　舌下神経核

c　脊髄前角

d　脊髄側角

e　脊髄神経節

51　68歳の男性。3か月前からの咳嗽を主訴に来院した。最近、喀痰に鮮血が混じることがある。喫煙40本/日を45年間。身長160 cm、体重52 kg。脈拍80/分、整。血圧128/72 mmHg。血液所見：赤血球350万、Hb 11.0 g/dl、Ht 33 %、血小板32万。血清生化学所見：総蛋白6.2 g/dl、アルブミン3.8 g/dl、尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン0.9 mg/dl、Na 124 mEq/l、K 4.0 mEq/l、Cl 88 mEq/l、Ca 8.4 mg/dl、TSH 0.6 μU/ml（基準0.2～4.0）、コルチゾール8.7 μg/dl（基準5.2～12.6）。胸部エックス線写真で右上肺野に腫瘤陰影を認める。

この患者で高値が予想されるのはどれか。

a　尿　酸

b　尿浸透圧

c　血清浸透圧

d　血漿レニン活性

e　アルドステロン

52　28歳の女性。2週前からの動悸を主訴に来院した。階段昇降時に息切れがする。体温37.3℃。脈拍120/分、整。血圧158/60 mmHg。頸部に弾性硬のびまん性甲状腺腫を認める。甲状腺に圧痛はない。心雑音はない。血液所見：赤沈15 mm/1時間、赤血球420万、Hb 13.0 g/dl、Ht 42 %、白血球6,000。血清生化学所見：TSH 0.1 μU/ml未満（基準0.2～4.0）、T_3 320 ng/dl（基準80～220）、FT_4 4.6 ng/dl（基準0.8～2.2）。$^{99m}TcO_4^-$ 甲状腺シンチグラム（別冊No. 28）を別に示す。

治療薬として適切なのはどれか。

a　抗菌薬

b　無機ヨード

c　抗甲状腺薬

d　β受容体遮断薬

e　副腎皮質ステロイド薬

別　冊
No. 28　写　　真

53　26歳の女性。会社の定期健康診断で高血圧を指摘され来院した。脈拍72/分、整。血圧176/98 mmHg。心雑音はない。上腹部に血管雑音を聴取する。血液所見：赤血球450万、Hb 13.4 g/dl、Ht 42 %、白血球4,200。血清生化学所見：尿素窒素16 mg/dl、クレアチニン1.0 mg/dl、総コレステロール160 mg/dl、Na 142 mEq/l、K 3.0 mEq/l、Cl 98 mEq/l、アルドステロン60 ng/dl（基準5～10）、血漿レニン活性16 ng/ml/時間（基準1.2～2.5）。

考えられるのはどれか。

a　Liddle症候群

b　Bartter症候群

c　大動脈炎症候群

d　甲状腺機能亢進症

e　原発性アルドステロン症

54　68歳の男性。3か月前からの体重増加、全身倦怠感および浮腫を主訴に来院した。身長171 cm、体重72 kg。軽度の満月様顔貌、中心性肥満および両下肢の浮腫を認める。脈拍78/分、整。血圧162/106 mmHg。尿所見：蛋白1＋、糖(－)。血液所見：赤血球486万、Hb 15.3 g/dl、Ht 46 %、白血球8,000。血清生化学所見：総蛋白6.6 g/dl、アルブミン4.0 g/dl、総コレステロール259 mg/dl、AST 29単位、ALT 56単位、LDH 412単位(基準176～353)、ALP 117単位(基準260以下)、Na 149 mEq/l、K 2.6 mEq/l、ACTH 490 pg/ml(基準60以下)、コルチゾール35 μg/dl(基準5.2～12.6)、ガストリン2,600 pg/ml(基準20～160)。頭部MRIで下垂体に異常所見を認めない。腹部造影CTで膵臓に数個の腫瘤、肝臓にも多血性の多発性腫瘤を認める。

この患者でみられるのはどれか。

a　血中デヒドロエピアンドロステロンサルフェート〈DHEAS〉濃度高値

b　CRH試験でACTH増加

c　メチラポン試験でACTH増加

d　デキサメサゾン抑制試験(8 mg/日、2日間)で尿中17-OHCS低下

e　副腎シンチグラフィで一側性の集積増加

55　3歳の男児。運動障害を主訴に来院した。乳児期からおむつに赤褐色粉末状結晶をみることが多かった。1歳ころから、つかまり立ちができなくなり、お坐りもできなくなってしまった。その後、舞踏病・アテトーゼ様運動が次第に強く出現するようになってきた。内反尖足傾向となり臥位姿勢となった。知的にも退行がみられるようになった。最近、自分自身の口唇や指を強くかむことが多くなり、出血と瘢痕化とを繰り返している。尿所見：蛋白(－)、潜血2＋、沈渣に赤血球20～30/1視野。血清生化学所見：尿素窒素22 mg/dl、クレアチニン0.5 mg/dl、尿酸9.3 mg/dl。

考えられる疾患はどれか。

a　Hurler症候群

b　Lesch-Nyhan症候群

c　Tay-Sachs病

d　フェニルケトン尿症

e　メープルシロップ尿症

56　44歳の女性。2年前から手指のしびれ感と下肢の麻痺症状とが出現し、階段の昇降ができなくなり来院した。常用薬はない。身長160 cm、体重48 kg。脈拍76/分、整。血圧162/92 mmHg。頸部に甲状腺を触知しない。両下肢に筋力低下を認める。尿所見：蛋白1＋、糖(－)。血液所見：赤血球400万、Hb 13.7 g/dl、Ht 39 %、白血球4,200。血清生化学所見：総蛋白5.9 g/dl、アルブミン3.9 g/dl、総コレステロール167 mg/dl、尿素窒素10.1 mg/dl、クレアチニン0.4 mg/dl、尿酸7.4 mg/dl、Na 143 mEq/l、K 2.7 mEq/l、アルドステロン28.6 ng/dl(基準5～10)、血漿レニン活性0.2 ng/ml/時間(基準1.2～2.5)。

考えられるのはどれか。

a　Cushing症候群

b　原発性アルドステロン症

c　続発性アルドステロン症

d　褐色細胞腫

e　腎血管性高血圧

57　56歳の男性。呼吸困難を伴う意識障害のため救急車で搬入された。庭木の手入れ中、蜂に刺され、数分後に倒れた。意識は混濁している。体温37.2℃。脈拍120/分、整。血圧76/48 mmHg。胸部に軽度の喘鳴を聴取する。両手背に蜂の刺し傷、発赤および腫脹を認める。

最初に行う治療はどれか。

a　輸　液

b　酸素吸入

c　エピネフリンの皮下注射

d　抗ヒスタミン薬の静脈注射

e　副腎皮質ステロイド薬の静脈注射

58　23歳の女性。上口唇の小水疱と痛みとを主訴に来院した。2日前から上口唇部がぴりぴりしていた。今朝起きると小さい水疱が出ていた。3年前から年に1、2回、上口唇に同様の水疱ができて、7～10日くらいで軽快するエピソードを繰り返していた。上口唇の写真(別冊No. 29)を別に示す。

この病変を起こす病原体の初感染によって生じるのはどれか。2つ選べ。

a　水　痘

b　突発性発疹

c　伝染性単核症

d　ヘルペス性歯肉口内炎

e　Kaposi水痘様発疹症

別　冊
No. 29　写　　真

59　48歳の男性。易疲労感と食思不振とを主訴に来院した。自動車用バッテリー再生工場内でフォークリフト運転等の作業に従事している。身長163 cm、体重54 kg。血圧142/88 mmHg。眼瞼結膜は蒼白。胸腹部に異常を認めない。便潜血(－)。血液所見：赤血球370万、Hb 9.8 g/dl、Ht 29 %、網赤血球7 ‰、白血球7,500。鉛健康診断で血液中鉛68 μg/dl(生物学的許容値40)、尿中のデルタアミノレブリン酸7 mg/l(生物学的許容値5)。上部消化管造影で異常を認めない。

異常が予想されるのはどれか。

a　心電図

b　腎機能検査

c　肝機能検査

d　神経学的検査

e　呼吸機能検査

60　56 歳の男性。意識障害(昏迷)のため救急車で搬入された。自殺を目的として、1時間前に除草剤のパラコートを飲んだ。

対応として適切なのはどれか。

a　浣　腸

b　胃洗浄

c　酸素吸入

d　アトロピン投与

e　硫酸マグネシウム投与